

「普通の日本人」とは普通どういう意味なのか

仲宗根 勝仁 (Katsuhito Nakasone) ・ 和泉 悠 (Yu Izumi) ・ 朱 喜哲  
(Heechul Ju)

所属 理化学研究所 AIP ・ 南山大学 ・ 大阪大学

政治心理学者の秦正樹は、「右でも左でもない普通の日本人」を自認する人ほど陰謀論やデマといったいかがわしい言説を信じやすいという調査結果を報告し、この調査に至るきっかけの一つとして、「普通の日本人」というレトリックがネトウヨ的言説を支える「免罪符」となっているように感じるようになった」と語っている(秦, 2020)。「ネトウヨ的言説」というものがいかなる言説を意味するのかはさておき、排外主義的・レイシズム的言説といった差別的言説が、「普通の日本人」を免罪符に行われることがあるとすれば、その言葉がなぜ免罪符として機能するかを考察するのは意義のあることだろう。

本発表では、「普通の日本人」という表現について、その言語構造や意味論的機能、語用論的効果を検討し、一見すると無害にも思える「普通の日本人」の使用が差別的言説に関わるその仕方について考察する。

まず、「普通の日本人」の言語構造について検討する。「普通の日本人」という表現は、「大学の図書館」や「最高のワイン」といった表現と同じ、「NP1 の NP2」という構造を持っている。言語学者の西山佑司によれば、この「NP1 の NP2」という構造を持つ表現の意味は、少なくとも 5 つのタイプに分類される(西山, 2003)。この西山の分類をてがかりに、「普通の日本人」の意味について、おもにタイプ A とタイプ B を候補として考察する。現時点の分析として、一見すると「普通の日本人」の解釈は「外国人の学生」と同様「NP1 デアル NP2」というタイプ B が適当に見えるが、「2000cc の車」と同様に、「NP2 は、R は NP1 である」というタイプ A の解釈が適当である可能性があることを指摘する。タイプ A の解釈における「R」は語用論的に補完される関係を表し、「僕は(注文料理は)うなぎだ」といううなぎ文におけるような補完が必要とされる。「普通の日本人」も同様に、「その日本人は(Rは)普通だ」というタイプ A の解釈が可能であり、特に R には、「日本人として」のような、アイデンティティやステレオタイプに関わる内容が補完される可能性がある。

次に、「普通」という表現に注目し、その意味論的機能について考察する。「普通」という表現には、「統計的な読み」と「規範的な読み」があることが指摘されている(e.g. Haslanger, 2014; Yalcin, 2016)。このような二種類の読みは、たとえば「女性はスカートを履く」といった総称文でも見られる。「女性はスカートを履く」という文は、多くの女性がスカートを履くという単なる統計的な事柄を表すのみならず、「女性はスカートを履くべきだ」と類似的な意味を持つ文として、すなわちステレオタイプや規則等に根差した主張のために用いられる場合がある(e.g. Haslanger, 2011; Leslie, 2008; 和泉, 2018)。「女性は普通スカートを履く」や「女性はスカートを履くのが普通である」といった文もまた、統計的な読みと規範的な読みの両方が可能である。これらの文が「普通」

を伴わない総称文と異なるのは、当の内容を裏づけるような何らかの実態が（事実かどうかに関わらず）存在することをより明示的に述べている点、さらに、その実態に沿うことは「そうあってしかるべき／当然であること」だと強調している点である。

最後に、以上の分析を踏まえたうえで、「普通の日本人」の持つ語用論的効果について検討する。「普通の日本人」という表現の使用により、少なくとも二つの語用論的効果が生じうる。一つは、「有標／無標」(marked/unmarked)に関わる効果である。Sally McConnell-Ginet が指摘するように、‘Americans’ という総称表現はしばしば、「無標の」、すなわち米国社会において標準的だとされる人々だけを表すために使われ、その際、「有標の」グループ、すなわち標準的だとされる集団に属さない「特殊な」人々が「消去」(erase)されている (McConnell-Ginet, 2020)。「Normal Americans」や「普通の日本人」といった表現は、総称表現よりもさらに明示的に、特定の社会におけるデフォルト・アイデンティティ(default identity)を共有する人々を指示するのであり、「普通の日本人」をあえて使用することで、日本における内集団と外集団(in-group vs out-group)の境界を先鋭化するといった効果が生じうる。「普通の日本人」を使用することで生じうるもう一つの語用論的効果は、前提(presupposition)に関わる効果である。「普通の日本人はサッカーが好きですか」という質問は、「普通の日本人」によって表される特定の集団の存在を前提とする。そして、その質問に「はい」と答えても「いいえ」と答えても、「普通の日本人」という表現が表す内容を直接否定することはできない。これらの効果を持つ「普通の日本人」の使用が無反省に受け入れられると、(意識的・無意識的を問わず)その基準とされるものから外れた人々が抑圧されたり、考慮の対象外として「消去」されたりといった、差別的取り扱いの発端となる可能性がある。

## 参考文献

- Haslanger, S. (2011). Ideology, generics, and common ground. In C. Witt (ed.), *Feminist Metaphysics* (pp. 179–207). Springer Verlag.
- Haslanger, S. (2014). The normal, the natural and the good: Generics and ideology. *Policita & Societa*, 3, 365–392.
- Leslie, S.-J. (2008). Generics: Cognition and acquisition. *The Philosophical Review*, 117(1), 1–47.
- McConnell-Ginet, S. (2020). *Words Matter: Meaning and Power*. Cambridge University Press.
- Yalcin, S. (2016). Modalities of normality. In N. Charlow & M. Chrisman (eds.), *Deontic Modality* (pp. 230–255). Oxford University Press.
- 和泉悠 (2018). 「総称文とセクシャルハラスメント」. 『哲學』, 69, 32–43.
- 西山佑司 (2003). 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』. ひつじ書房.
- 秦正樹 (2020). 「右でも左でもない普通の日本人」を自認する人ほど、陰謀論を信じやすかった…! : 研究が示す驚きの事実」, 『現代ビジネス』(WEB記事). <https://gendai.ismedia.jp/articles/-/77698> (最終アクセス: 2021年8月31日)